

《偷盜》の構図

——六道の辻の女菩薩と女夜叉——

森 正人

《偷盜》(『中央公論』大正六年四月、七月号)は、芥川龍之介みずから失敗作と認めて、改稿の意欲はもちながらついに果たされず、生前どの単行本にも収録されなかつた。この作品の意義が改めて認識され、本格的に論じられるようになるについては、海老井英次の研究¹⁾が大きな役割をはたした。海老井によれば、《偷盜》は、《羅生門》を継承する作品であつた。すなわち、《羅生門》の下人が駆け去つた「黒洞々たる夜」²⁾「エゴイズムを超克する原理たる(何ものか)」を描き出そうとした。しかし、その主題把握の不十分さは、この作品を「安い絵双紙」「支離滅裂」(大正六年三月二十九日、四月二十五日、松岡譲宛書簡)に終わらせてしまったという。早くから構想され、期するところが大きかつただけに、芥川の味わたつた幻滅は大きかつた。

《偷盜》をめぐる近年の諸論は、ほとんど例外なくこの海老井の視点を承けて、拡大、深化、修正、批判を試みている。それらは、《偷盜》一箇の失敗のゆえんを問うばかりでなく、そのことを通して、芥川の本質を、あるいは少なくともその初期の基軸を問おうとしている。本稿もまた、そうした試みの一つといつてよい。ただ、芥川が掘つたと一般に理解されているところの、そして、批評家もまたそれをもって芥川を裁断できると信じられているらしいところ

るの近代的理知の場から、この作品をいまま少し広い場へ導こうとするものである。その場に置くことによって、先走った観念やこわばった表現の下から、ある構図が明瞭に浮かび上がってくるであろう。

二

《偷盜》の人物たちを取り巻いているのは、衰滅の諸相である。昏さ、渴き、無風、疫病、腐敗などさまさまの素材を取りそろえて、そのことが示される。

たとえば、物語の始まりを告げる、猪熊の婆と太郎が出会う場面、朱雀綾小路の辻には、

枝の疎な、ひよろ長い葉柳が一本、この頃流行る疫病にでも罹つたかと思ふ姿で、形ばかりの影を地の上に落ちてゐる。

そして、その路上には、

車の輪にひかれた、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をびくびくやつてゐたが、何時か脂ぎつた腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないうりになつてしまつた。

というできごとが生起する。生気を失つた柳、息絶えていく蛇の姿に、この世界の現在と行く末とが暗示されているのであろう。また、京の町の随所に無残な死骸が横たわり、腐臭や死臭が漂っている。あるいは、街にはほとんど人影も絶え、家々も静まりかえつて、「町中の人が悉、死に絶えてしまつたかときへ思はれる」という叙述もみられる。こうして、衰滅を死と置き換えてもよいであろう。

しかし、そういうなかでこそ、旺盛な生命力をみせているものがある。蛇の死骸にたかる青蠅、人を恐れぬ鴉の群、棄てられた病人を狙う野犬、子供の死骸についた蠟、いずれも死の周辺に生きる野性の生き物たちである。また、洛中に盛んに繁っているのは、薊、蓬、薄などの、荒れ地に生える雑草であつた。《偷盜》とは、何よりもこういう世界

であった。

猪熊の婆は述懐する、

京の大路小路に、雑草がはえたやうに、自分の心も、もう荒んだことを苦にしない程、荒んでしまった。

と。太郎も、盜賊団に入る前に放免をしていた頃は、「三宝を敬ふ事も忘れなければ、王法に違ふ事も怠らなかつた」が、「何時の間にか、悪事を働くのが、人間の自然かも知れないと思ひ出した」。

あらゆる文化的、伝統的なものが価値を失つて、野蠻なものが支配している世界では、人間もまた人間として生きることができないであろう。人は、畜生や雑草と等しく生きることを余儀なくされている。

たとえば、猪熊の婆が、「蝶の顔を思はせ」て卑しげであり、「東鴉のやうな笑声を立て」、「猿のやうな帷子姿」で歩を運ぶと描かれているのは、偶然ではない。動物の比喩をもつて形容されるこの姿が、「猿のやうな」、「鶏の足のやうな」、「肉食鳥のやうな」、「鴉の啼くやうな」、「蝶のつぶやくやうな」と描写される。《羅生門》の老婆の姿を継承していることには、幾度も注意が向けられている。その娘の沙金の姿は、次郎の目には、「獸のやうな心」、「猫のやうな敏感さ」、「恐しい野性と異常な美しさ」をそなえ、「目が、野猫のやうに、鋭く」、「語の中には、蝸のやうに、人を刺すものがある」と映っている。その沙金と夫の猪熊の爺とが通じているのを黙認している、猪熊の婆のことを、太郎は「畜生より、無残な奴だ」と思う。そして、猪熊の爺と太郎とは、互いに相手を「畜生」とのしり合つて争う。猪熊の爺は、太郎に向かつて「畜生でも、親殺しはすまいて」と罵詈雑言を投げつけ、はてはみずからをも「畜生」と決めつけてはばからない。あるいは、藤判官家の侍の一人は「妾の云ふ事なら、何でも、犬のやうにきく」と、沙金に評される。それに、爺と婆と沙金の住まいが、「猪熊」(「猪隈」とも表記される)に設定されているのも偶然ではないであろう。太郎は、「どうせみんな畜生だ」とつぶやく。こうして、人間が畜生であるほかない世界、それが《偷盜》であった。

三

《畜生》とは、単に動物という言葉の置き換えでもなければ、単なる罵倒語でもない。それは、仏教でいうところの、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道の一つである。《偷盜》には、まさにその六道の諸相が描かれているといつてよい。

餓鬼道は、飢えと渇きの世界である。たとえば、

どこもかしこも、炎天の埃を浴びたこの町の辻で、僅に一滴の湿りを点じたものがあるとすれば、それはこの蛇の切れ口から出た、腥い腐れ水ばかりであらう。

の一文は、洛中が渇きのうちにあることを物語っている。飢えについては明示されていないけれども、疫病の流行に飢餓はつきものであり、瀕死の病人の枕もとに、「縁の欠けた土器がたつた一つ（底に飯粒がへばりついてある所を見ると、元は粥でも入れたのであらう。）捨てたやうに置いてあつて」という一節に暗示され、野良犬が人を襲うのも、人間が飢えているからである。

また、藤判官家を襲撃した盜賊団と迎え撃つ侍たちとの鬪争が描かれ、それは修羅鬪争の世界とみなされる。就中次郎は、始め狩犬に、続いて野犬の群に襲われる、つまり畜生と同じ次元で果てしない戦いを続けなければならない。こうしてたしかに《偷盜》は、《羅生門》における下人の「餓死をするか盗人になるか」、換言すれば、餓鬼道を甘受するか畜生の生き方を選ぶかという課題を、拡大して継承していることが知られる。

それは、直接には大正四年春、吉田弥生との恋愛事件によってひきおこされた家族との対立、葛藤を契機に、芥川の内部に生じた思念の具体化であったとみなされる。彼は、友人たちに送った書簡に繰返し次のように書いた。

イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたることは出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒

すことは出来ない。(中略) 周囲は醜い。自己も醜い。(中略) しかし僕にはこのまゝ回避せず、むべく強ひるものがある。そのものは僕に周囲と自己の醜さを見よと命ずる。(三月九日、恒藤恭宛)

芥川は、ここで現実と人間存在の醜悪さに改めて立ち会わされ、しかし、それを身をもって引き受けようと宣言しているのである。仏教の六道の觀念と結び付けられて、そうした醜悪さにさまざまの名辭と形容が与えられた。後年の言葉を借りれば、「人間獸」(《文藝的、余りに文藝的》)、あるいは、「地獄よりも地獄的」な「人生」(《侏儒の言葉》(地獄))、あるいは「修羅、餓鬼、地獄、畜生等の世界はいつも」その外にあつたのではないところの「現世」(《今昔物語鑑賞》)。こうした思念に添って、「目前の境界が、すぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前する」ところの《孤獨地獄》(大正五年三月)、「人面獸心」と評される良秀が、地獄變の屏風を描くために、車もろとも最愛の娘の焼き殺されるのを目のあたりにしなければならぬ《地獄變》(大正七年四月)も書かれたであろう。六道の觀念は、初期芥川の基軸の一つというべきではないか。

芥川が、《偷盜》に仏教的な世界觀をもつて枠組みを与えていると解してよい根拠は、この題号自体にも見出される。《偷盜》とは、仏教固有の語とはいえないけれども、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒のなかの、犯してはならない一つである。または、仏教でいう十惡、すなわち殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の一つである。

そして、《偷盜》のなかの人物たちは、五戒のこゝとくを破り、その所業は十惡のすべてを尽くしているといつてよい。《偷盜》はいわば彼らの生業である。《殺生》もためらわない。《邪淫》は、沙金および彼女をめぐる主要な人物たちすべてのふるまいである。沙金は、さまざまの男たちに身を任せるだけでなく、義理の父猪熊の爺とも通じている。太郎と次郎の兄弟は、その沙金を争っている。猪熊の爺は、母(猪熊の婆)と娘(沙金)とに通じ、召使の娘阿濃を犯して孕ませる。《妄語》(《兩舌》)も日常茶飯事であつた。たとえば、沙金は「絶えず嘘をつく」と叙述され、猪

熊の爺は、婆との馴れ初めを太郎に語って聞かせたあと、「あれは、みんな嘘ぢや。(中略) わしは、嘘つきぢやよ。」と言ひ捨てる。その一方で、「人殺し。親殺し。嘘つき。親殺し。親殺し」——のちに明らかにされるように、そのじつ阿濃の胎の児を墮そうとしていた爺は、子殺しを企てていたことになり、したがって、太郎への非難「親殺し」の語はむなししが、みずからを〈畜生〉と称してはばからないことと呼応する——という〈悪口〉を、太郎に向かって投げつける。このように争う場面で、爺は「酒肥りに肥った、禿頭の老人」として登場し、太郎の眼には「酒飲みの、狡猾な、卑しい老人」と映り、顔を寄せられると「酒くさい臭ひが、ぶんとする」というのは、〈不飲酒〉の破戒が強調的に語られているのであろう。また沙金が、藤判官家の侍をたぶらかし、言葉巧みに次郎をそそのかして太郎を陥れる計画をもちかけるのは、〈綺語〉と称してよい。

四

《儉盜》の人物たちは、さながら畜生道を生きているが、そのなかに救済のかすかな可能性が動き始めている。彼らは、幼かった日々、あるいは若かった頃を回想する。

猪熊の婆の心の中には、かう云ふ考「すべてが変つたやうで變つてゐない」が、漠然とながら、浮んで来た。そのさびしい心もちに、つまされたのであろう、円い眼がやさしくなつて、螻のやうな顔の肉が、何時か、ゆるんで来る。(下略)

太郎の心には、一瞬の間、幼かった昔の記憶が、——弟と一しよに、五条の橋の下で、鮎を釣つた昔の記憶が、この炎天に通ふ微風のやうに、かなしく、返つて来た。(下略)

懸想した猪熊の爺と、懸想された猪熊の婆と、太郎は、自ら自分の顔に、一脈の微笑が浮んで来るのを感じたのである。

「微笑」のように訪れる追憶、回想がおのずとときそう。「微笑」は、彼らの救済を予感させる。やがて、それは救済のしるじとなるであろう。次郎は、太郎によって野犬の群のなかから救い出される。そのとき、

馬上にある事も忘れたやうに、次郎はその時、しかと兄を抱くと、うれしさうに微笑しながら、頬を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙を落したのである。

一方、深手を負つて羅城門まで引き上げて来た猪熊の爺は、仲間に見守られながら息を引き取る。と思ふと、ふるへる唇のほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今迄にない無邪気な表情が、何時か顔中の筋肉を柔げた。

また、彼らの救済のいま一つの具体的なるしは、月と星である。猪熊の婆は、爺の身代わりになつて傷を負い、息絶える。

唯、自分の上にひろがつてゐる大きな夜の空と、その中にかゝつてゐる小さな白い月と、それより外のものは、何一つはつきりとわからない。

また、和解を遂げた太郎と次郎の頭上には、「涼しい天の河がかゝつてゐる」。

芥川の知識のなかにあつたかどうかはわからないけれども、月は勢至菩薩の化身と考えられていた。

南無帰命月天子、本地大勢至。(能《羽衣》)

月はかの如来「阿弥陀」の脇土として、有縁を殊に導き、重き罪を軽んずる、天上の力を得るゆゑに、大勢至とは号すとか。(能《嬖捨》)

それでは、こうした安息は、どのようにして彼らにもたらされることになるか。救済の予感と救済のしるじを媒介するのは阿濃の存在である。阿濃は、仲間の盜賊たちを送り出したあと、彼らが繰り広げている修羅鬪諍の巷より一段高い羅城門の楼上にあつて、他の誰よりも先に、「微笑」とともに空の彼方の月と星を望むのであつた。

門上の様に、おぼつかない灯がともつて、窓が一つ、かたりと開くと、その窓から、遠い月の出を眺めてゐる、小さな女の顔が出た。阿濃は、かうして、次第に明るなつて行く京の町を、目の下に見下ろしながら、胎児の動くを感じる毎に、独りうれしさうに、ほく笑んでゐるのである。(下略)

しかし、その間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅生門の樓上に佇んで、遠くの月の出を眺めてゐる。
(下略)

阿濃は、その空へ眼をやつて疎らな星に、うつとり眺め入つた。

と、繰り返される。空の遠くの月と星は、「一切の悪が、眼底を払つて、消えてしまふ」ところの「現ながらの」「うつくしく傷しい夢」のあり処である。

さらに、この月、星と呼応するものが、葬られる翁を包む凌霄花の香とそれを運ぶ微風であった。

有明の月のうすい光に蕭条とした藪が、微かに梢をそよめかせて、凌霄花のほひが、愈濃く、甘く漂つてゐる。時々かすかな音するのは、竹の葉をこる露であらう。

これら夜明けの微風と凌霄花の香と露とは、昼間の無風と雑草と死臭と渴きとに对照されて、もう一つの安息と救済のしるしである。

そして、それらは極楽世界の微風と芳香に通うとみてよいであろう。これも芥川の知識のなかにあつたとの保証はないけれども、極楽は、

微風、しずかに動いて、もろもろの技葉を吹くに、無量の妙法の音声を演べ出す。(中略) 自然の微風、徐かに起りて微動す。その風、調和にして、寒からず暑からず、暖涼柔軟にして、遅からず疾からず。もろもろの羅網およびもろもろの宝樹を吹くに、無量の微妙の法音を演発し、万種の温雅の徳香を流布す。それ(徳香)を聞くことあらん者に、塵勞垢習、自然に起らず、風、その身に触れなば、みな快樂をう。(大無量寿經)

と描かれるような世界であった。なお、いうまでもないが、凌霏花の香りは、異香が漂うという、極楽往生の最も一般的な奇瑞に擬せられてもいる。

その凌霏花の芳香もまた、まず楼上の阿濃の周囲に漂い始めることを見のがすことはできない。深い夜の底では、盗賊たちが絶望的な闘争を続けているさなかであった。

町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返してあるのであらう、自ら頂を躡げな月明りにぼかしながら、どの峰も、ちつと物を思つてでもあるやうに、うすい靄の上から、静に荒廃した町を見下してゐる——と、その中で、かすかに凌霏花のにほひがした。

この芳香が微風に運ばれて、猪熊の爺はじめ盗賊たちのもとに届くのは、彼らが羅城門に引上げて来て、やがて爺が臨終を迎えようとする頃であった。猫の鳴き声がすると言う者がいる。

皆、一時にひつそりとなつた。その中を、絶え絶えにつづく猪熊の爺の呻り声と一つになつて、かすかに猫の聲が聞えて来る。と流れ風が、始めてなま温く、柱の間を吹いて、うす甘い凌霏花のにほひが、何処からかそつと一同の鼻を襲つた。

猫の鳴き声と聞こえたものは、阿濃の産んだ赤ん坊の泣き声であった。あたかも、阿濃母子のもとから微風が吹き始め、それに乗って芳香ももたれされたかのようにである。

阿濃は盗賊たちを救う赤ん坊を送り届けた。まずこの赤ん坊は、盗賊たちのささくれだった心をなごませる。彼らは、「別人のやうに、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた」、そして「一同が、創も忘れたやうに、どつと笑ふ」。それまで「息のつまつたやうな笑ひ声」しか洩らさなかつた彼らが初めて見せる穏やかな微笑であり、初めてあげる明るい笑い声であった。しかも、猪熊の爺は赤ん坊を見つめ、その指に触れながら、赤ん坊が我が子であることを告白して、息を引き取るのである。

唯、彼の顔には、秘密な喜びが、折から吹き出した明け近い風のやうに、静に、心地よく、溢れて来る。彼は、この時、暗い夜の向うに、——人間の眼のどこかない、遠くの空に、さびしく、冷かに明けて行く、不滅な、黎明を見たのである。

猪熊の爺の見た、この「不滅な、黎明」は、羅城門楼上の阿漉によって予告されている。彼女は、「坊やはい見だね。おとなしく、ねんねしてお出で、今にちき夜が明けるよ。」と、やがて生まれようとする胎児にささやきかけていたからである。

五

救済の可能性としての微笑、あるいは救済への憧憬としての夜の月と星から、救済のしるしとしての微笑および明け方の凌霄花の芳香へどのように導くか、また、救済の内実はどのようなものであるか。

第一に、注意しなければならないのは、《偷盜》の世界を照らす月は遠い空の彼方であって、しかも、その投げかける光はまことにはかなげであるという点である。

〔阿漉が眺めていると〕 早に瘦せた月は、徐にさみしく、中空へ登って行く。(下略)

唯、自分〔猪熊の婆〕の上にひろがつてある大きな夜の空と、その中にかゝつてある小さな白い月と、それより外のもの、何一つはつきりとわからない。

この「瘦せた」「小さな」月と「疎らな星」は、救済の頼りなさであろう。それに対して深く広いのは夜である。それゆえ、

——阿漉は、この時、唄をうたひながら、遠い所を見るやうな眼をして、蚊に刺されるのも知らずに、現ながらの夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかも又人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である。(涙

を知らないものゝ見る事が出来る夢ではない。ここでは、一切の悪が、眼底を払つて、消えてしまふ。が、人間の悲しみだけは、——空をみたくしてゐる月の光のやうに、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしく巖に残つてゐる。……

と、夢₂救済は人の悲しみに彩られている。

《偷盜》の中心部分は、昼から夜を経て夜明けに至る一日である。それは、盜賊たちが餓鬼道、畜生道から修羅道を経て、人間へ回帰するという、作品の構成と正確に呼応している。清水康次は、

「偷盜」執筆の目的は、(中略)空虚という問題に対して、「存在」を、あるいは本当の生を、可能ならしめようとする試みなのである。

と説いた。もちろん、これを単純に憎から愛へ、悪から善へ、罪から救済へと図式化するわけにはいかない。《偷盜》にあつては、憎と愛、罪悪と救済は常に背中合わせの関係にあつて、憎と罪悪のきわみに、愛と救済とがはじめて訪れるからである。太郎、次郎の兄弟の和解がなる場面もそうである。

彼〔太郎〕は空も見なかつた。路も見なかつた。月は猶更眼にはいらなかつた。唯見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。(下略)

怪しく熟してゐる〔太郎の〕隻眼に、次郎は、殆ど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかつた、不思議な愛が燃え立つてゐるのを見たのである。

ただし、ここでたしかに太郎は一旦は弟を見棄てようとして、馬首を廻らして助けたかも知れないが、次郎は救い上げられただけであつて、たとえば我執を克服しえたのかという疑問が出されるであらう。それは、次郎が狩犬、野犬に囲まれて苦闘し、死の危機に瀕する場面の意味を考えることによつて説明できる。次郎が闘わなければならなかつたのは、彼の内なる畜生性^⑤であつた。馬上に這い上がるうとする次郎に牙が迫る。しかし、

犬は、空しく次郎の脛布を食ひちぎつて、うづまく獣の波の中へ、まつさかさまに落ちて行つた。

このようにして、振り切つたものこそ彼自身の畜生性であつた。こうして、ここにもみずからの畜生性を生き抜き、それと闘ひ抜いた果てに、ようやく「安息」はもたらされるといふ關係が認められる。

愛も救済も、対立するはずの憎と罪惡とに内側から支えられている、こうした境界は、「一切の分別が眼底を払つて、消えてしまふ」とも言い換えられる。そのような意味での「本当の生」とは何か。

越智治雄は、「限りない夜の中にいる者のみの知る、感傷とは無縁な愛」と説いた。さらに下坂恵は、芥川の書簡のなかの、「自分には善と惡とが相反的にならず相關的になつてゐるやうな気がす」「善惡一如のものを自分は見てゐるやうな気がする也」(大正三年一月二十一日、恒藤恭宛)を引きながら、その「善惡一如のもの」を現前させるというモチーフを導き出している。これにならつて、芥川は「愛憎一如」をとらえようとしていたといふことができるであらう。

猪熊の爺の見た、あの「不滅な、黎明」は、「暗い夜の向うに、——人間の眼のとゞかない、遠くの空に」、かろうじて見えるはずのものであつて、阿漣が、羅城門の上から望んでいた「遠い所」、息絶えてゆく婆の眼に映つた「大きな空」、太郎の見た「限りない夜」の向こうにあるものと同質であらう。しかも、臨終の爺の微笑を形容する「不思議な」といふ語は、次郎の見た「愛」をも形容していた。それは、原義通り、人間の思議を越えているのであつて、その思議を越えた、言い換えれば、「一切の分別」から自由なところこそ、「愛憎の深み」「憎惡に近い愛」、換言すれば「愛憎一如」のものであらう。こうして、彼らを救済する原理「何ものか」は、そのなかに惡、罪、憎を内包しているものでなければならなかつた。

それまでは太郎をのしり、苦痛に苦しみつつ、死への恐怖にとらわれていた爺を救つたのは、赤ん坊であつた。正確に言い換えると、死にゆく者と、生命が宿つたばかりの赤ん坊とは別人ではない。爺は、この赤ん坊に生まれ変

わったのである。⁸赤ん坊を見つめる爺について、「今迄にない無邪気な表情が、何時か顔中の筋肉を柔げた」というのは、彼が嬰兒に還つたことを意味しないであろうか。

嬰兒に還ることによる救済、それは次郎の救済に通う。第一に、次郎が野犬の牙から脱出したことは、彼の擬死再生を意味するであろう。第二に、

彼は、限らない安息が、徐に心を満して来るのを感じた。母の膝を離れてから、何年にも感じた事のない、静な力強い安息である。――

と、その安息が、母親の膝の上のそれに等しいということは、幼児に回帰した次郎を暗示している。救済を予感させていた追憶が、一気にここに集約される。三好行雄は、⁹「阿濃の〈母〉は確実に猪熊を救済した」、また「次郎のこの安息から阿濃の〈母〉までの距離はほんの一跳びにすぎぬように見える」と論じている。

六

畜生、修羅の世界を生きた《偷盜》の人物たちは、それぞれに人間を取り戻した。しかし、一切の悪と罪を負わされようにして、ただ独り奈落の底に沈んでいった女がいる。最後に、太郎、次郎に殺される沙金である。阿濃の〈母〉の問題を考えるためには、この沙金に対してとりあえずの一瞥を与えて置かなければならない。

沙金は、彼女を除く主要な登場人物たちと対照的である。

第一に、彼女は自己の内面を決してうかがわせない。したがって、彼女は追憶にふけることもない。第二に、彼女の時折みせる微笑は、「冷な微笑」「気味悪く、微笑」「微笑を絶たない顔に、一脈の殺気を浮かべながら」と、他の人物たちの浮かべるそれと異質であった。そして、その美貌、その知謀、その冷酷さにおいて、とりわけ阿濃と対照的である。この〈宿命の女〉¹⁰にだけは、救済の可能性が閉ざされているかのようである。

次郎は沙金に向かつて言う、

「内心女夜叉さね。お前は。」

これは、仏教的な観点から女人の罪障の深さをいう、よく知られた言葉「女人地獄使、能断仏種子、外面如（似）菩薩、内心如夜叉」に基づいている。「女夜叉」とは、たしかに誤用である。ただし、芥川はこれと同系の「女菩薩」という語をしばしば用いているし、先例もある。¹¹⁾

乞食のやうな姿をした沙門が、何か頻にしゃべりながら、見慣れぬ女菩薩の画像を掲げた旗竿を片手につき立てて、佇んでゐるのでございました。（《邪宗門》 大正七年十一月）

わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。（《薺の中》 大正八年十二月）

グアワは何といふ女菩薩であらう。現に仏画師はグアワのことを蓮華夫人と渾名してゐる。實際川ばたの枝垂れ柳の下に乳のみ児を抱いてゐる妻の姿は円光を負つてゐるといはなければならぬ。（《第四の夫から》 大正十三年三月）

沙金について言われた「内心女夜叉」は、当然「外面如（女）菩薩」を含蓄する。そしてもし、阿濃との対照が構えられているとすれば、阿濃こそ、「外面如（女）夜叉、内心如（女）菩薩」と評されなければならないであらう。じつは、三好行雄が、阿濃の（母なるもの）について次のように論じている。

畜生道に落ちた悪を（人間の悲しみ）にまで浄化する存在、あらゆる悪をつつみこんで、それを（悲しみ）としてひきうける抱擁者（母）による救済のモチーフはあざやかである。

われわれはこれを、もう菩薩の慈悲と呼び換えてもよいのではないか。阿濃は（母）であり、菩薩であった。

菩薩とは、仏になるために修行を続けている者である。そして、完全な悟りを得る以前の菩薩は、衆生と同じ地平に降り立って、彼らを救おうとする。菩薩は、致富、幸福な結婚、子宝など、衆生の現世的な利益の願いを満たすで

あろう。また、善根を植えることもかなわず、罪業を積み重ねるほかない、したがって来世は悪道に沈むであろう衆生を、決して拒むことはない、菩薩は、そういう衆生の劣った機根に合わせて導くのである。日本における菩薩への信仰は、特に観音、地藏に対して広く永い。このうち特に阿濃と関連づけられるべきは、観音であろう。なぜならば、その絵像、彫像によっても知られるように、観音は、しばしば両性具有ないし女性性かたちで表象されるからである。

そのように、観音が両性具有であること、あるいは女性原理ないし母性と結びつけられるのは、それが仏教に組み入れられる以前の性格を失っていないからである。民族学、宗教学、神話学は、仏教の菩薩の前身が、世界にほぼ普遍的な大地母神であったことを明らかにしている。¹³この女神は、人類の信仰の古層に棲んでいて、誕生、豊穡および死を司っている。彼女は、すべてのものを産みだし、育み、そして死せるものを抱き取り、収めるのである。キリスト教のマリアもまたこの女神の後裔であった。¹⁴石田英一郎によれば、隠れキリシタンの生み出したマリア観音は、同じ根から分かれた母子神が異なる経路をたどった末に、文化の接触によってふたたび出会い、結び付くべくして結び付いたものであるという。

ただし、菩薩としての阿濃は自分の孕んだのが誰の子であるかも分からないほど、「白痴に近い天性を持って生まれた」と設定されている。このことについて、三好行雄が、その「認識の腐臭からもっともおい単純無機の魂」にこそ、聖母マリアの（母なるもの）ともひびきあうものを認める観点を提出している。これに、「白痴に近い」者こそ神仏に最も近いというのが、近代以前の通念であったことを付け加えるべきであろう。

また、これまでの阿濃の生涯は、汚辱にまみれていた。

或時は、町の子供にいちめらられて、五条の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。或時は、饑にせまつてした盗みの咎で、裸の儘、地藏堂の梁へつり上げられた。それがふと沙金に助けられて、自然とこの盗人の群

にはいつたが、それでも苦しい目にあふ事は、以前と少しも變りがない。

阿漉が菩薩であるとすれば、まさに和辻哲郎が指摘した日本的な（苦しむ神）であつた。かつては人としての辛酸をなめて神となり、そうした前身をもつがゆえに、その神は衆生の苦しみを我が苦しみとして、衆生を救ひうるのである。芥川は、そういう神を、

えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなされ、焦がれ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに悩むものを、救うてとらせうと思召し、宗門神となられたげでござる。《じゅりあの・吉助》 大正八年八月と描き出している。

七

（女夜叉）としての沙金は、母の慈愛あるいは菩薩の慈悲から最も遠い存在であるようにみえる。大方の醜者の描く沙金像は、次郎の視線と述懐を通して作り上げられているのではないか。——「女夜叉」の語も次郎の口から吐かれている。たとえば、石割透は、「觀念からも倫理からも解放された、自然そのままの悪」と評するが、しかし、次のような一面を讀み落とすわけにはいかない。

藤判官家の襲撃に向かおうとするとき、沙金は、「しよんぼり、指を嚙んで立つてゐる」阿漉にやさしく声をかけ、阿漉は、「子供のやうに、うつとり、沙金の顔を見」るし、阿漉にとつて、「ふだんは何かと劬つてくれる沙金」であつた。たとえば、また次郎の背後から銚を構えて忍び寄る藤判官家の侍を射倒した「たかうすべの矢」が、沙金の弓から放たれたものであることに、彼は氣付いたかどうか。さらに、息を引き取る猪熊の爺を「傍からそつと支へた」のも沙金であつた。単に、その美貌や性的魅力や残酷さによつて、彼女が盜賊団の首領となつたのではないことは、もはや明らかであろう。

《偷盜》はメリメの《カルメン》を粉本として、沙金はカルメンに当たるといふ、吉田精一の指摘を受けて、長野菅一¹⁹⁾は、メリメのそれに及ばない女主人公の造型の失敗が《偷盜》失敗の根因と論ずる。しかし、造型の不完全さを「作者の腕の相違」のみに帰せられるかどうか。むしろ、平岡敏夫は、沙金の内面に立ち入っていないことに触れて、これは、沙金のような女の心はとらえることのできぬとする女性認識、言いかえれば、信じがたい女性の存在を、他の諸人物とは区別される、このような特別な方法によって描いたとしか言ひようがない。

として、後年の《薮の中》(大正十一年一月)の真砂につながっていくと言及する。ただし、当面重要な問題は、「認識しがたい女性の存在に芥川はぶつかつた」というような、芥川の女性観ではなくて、その「特別な方法によって、善悪の基準だけでは計れない、つまり(善悪一如)の存在が描かれているということである。高橋陽子が、「日常においてふつう覆いかくされている本源的な(禁忌)」を体现する存在と解しているのは至当であろう。

それでは、その非日常的な(禁忌)は何に根ざしているか。相反するものが併存する沙金像は、さらに次のようにも叙述されている。すなわち、次郎によれば、沙金のように「醜い魂と美しい肉身とを持つた人間は、外にゐない」といふ。一方、太郎によれば、彼女が盗人の頭であること、「日頃は容色を売つて、傀儡同様な暮しをしてゐる」ことがだんだん分かつてきて、「が、それは、反てあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光をかけるばかりで、少しも卑しいなどと云ふ氣は起させない」。これらは、兄弟の対照的な女性観を語っているだけでなく、沙金自身の二面性を示している。

「円光」とは、沙金の隠された聖なる側面である。すでに揚げたように、四人の夫を持つグアワ——枝垂れ柳の下に立つ姿は楊柳観音を、乳飲み児を抱く姿は聖母マリアを連想させるであろう——にも円光がかかつていたし(《第四の夫から》)、また、「傀儡」といえば、良秀は「吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顔を写し」た(《地獄変》)。あるいは、「多くの男を通わせている」和泉式部も、道命が眼には麻耶夫人(《道祖問答》 大正五年十二月)と映るので

あった。聖なるものの遊女性、卑賤なるものの聖母性、それらが表裏する関係にあること、しかもそうした遊女性と聖母性とがしばしば一挙に反転するという觀念は、ごく一般的なものであろう。たとえ芥川は、天女のごとき女を求め俗の夢のなかに吉祥天が現れて、その俗と契つた物語（今昔物語集卷十七第四五）を讀んだはずであり、神崎の遊女の長者が、生身の普賢菩薩であつた（十訓抄第三・一五など）という、よく知られた物語を目にしたことも疑いを容れない。《手帳二》には、「聖母マリア吉原の女郎となる話。道中より昇天す」という創作メモがある。こうして、淫蕩な沙金もまた聖なるものをひそませていた。

また、崇高なるものと卑小なるもの、慈愛と殘虐とが同居している（女菩薩）は、《黒衣聖母》（大正九年四月）にとらえられている。

聖母は黒檀の衣を纏つた儘、やはりその美しい象牙の顔に、或悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛へてゐる。この聖母は、まことに皮肉な方法で祈る者の願いをかなえたという伝説をもつてゐる。そうした「或悪意を帯びた」救済は、《運》（大正五年十二月）にも語られている。「一生安樂に暮せますやうに」と、清水の観音に願をかけた女が恐怖と自らの悪事を引き換えに、願いを聞き届けられたという物語である。大地母神（女菩薩）の慈悲の微笑の裏に隠された冷酷な一面、その典型を我々は十一面観音にみることが出来る。十一面観音像の前三面が寂靜相であるのに対し、左三面は威怒相、右三面は利牙上出相、後一面は笑怒（暴悪大笑）相を示す。

これらと逆に、常に嬌羞を見せていた女の変貌を語る《あばばば》（大正十二年十一月）。

女はもう「あの女」ではない。度胸の好い母の一人である。一たび子の為になつたが最後、古来如何なる悪事も犯した「母」の一人である。

また、芥川における母性と悪との結合は《女》（大正九年四月）に端的に現れる。

——無数の仔蜘蛛を生んだ雌蜘蛛は（中略）母親の限りない欲喜を感じながら、何時か死に就いてゐたのであつ

た。——あの蜂を噛み殺した。殆「悪」それ自身のやうな、真夏の自然に生きてゐる女は。

真夏の誕生と死、蜘蛛の「殺戮と略奪」と「母親の限らない欣喜」は、『偷盜』に通うところが多に多い。

こうして、沙金と阿濃とは単に対立する関係にあるのではなかった。二人は、同一の〈太母〉原型から、生と死、与えるものと奪うもの、抱きとめるものとむさばり食うもの、保護するものと拒絶するもの、つまり肯定的なものと否定的なものに分割されたのであった。換言すれば、一般に「如（女）菩薩」と「如（女）夜叉」とが、女性の二面性を外面と内心とに分けてとらえる言葉であつたとすれば、阿濃と沙金とは、大地母神Ⅱ（女菩薩）を二つの人格に分割してみせたものといえないか。沙金の死を見届けるのが阿濃であつたのは、そのような意味で無視しがたい。慈愛と残虐とを合わせ具えた大地母神Ⅱ（菩薩）の統合が、そこで図られようとしたのであろう。そこにこそ、本質的な意味での〈善悪一如〉〈愛憎一如〉が実現するはずであつた。しかし、みずから性急に世界を救済しようとした芥川は、夜叉としての半身を抹殺するにとどめたようである。

〔注〕

（1）海老井英次「偷盜」への一視角『語文研究』31・32合併号 一九七一年一〇月、『日本文学研究資料叢書

芥川龍之介Ⅱ』に再録。

「我執」から〈救済〉へのロマン——『偷盜』論続稿（『近代文学考』2号 一九七四年三月、『日本文学研究資料叢書 芥川龍之介Ⅱ』に再録）。

『芥川龍之介論攷——自己覚醒から解体へ——』第一部第四章第二節「偷盜」——ロマンへの野心とその挫折

（2）『偷盜』構想メモに次のような一文がある。

“There is something in the darkness,” says the elder brother in the Gate of Rasho .

(3) このような芥川の間観に關しては、東郷克美「猿のやうな」人間の行方——「羅生門」「儉盜」から「地獄変」へ——（『一冊の講座 芥川龍之介』参照）。

(4) 清水康次「儉盜」論——風景からの仮説——（『女子大文学』32号 一九八一年三月）。

(5) 越智治雄・菊地弘・平岡敏夫・三好行雄「シンポジウム 芥川龍之介の志向したもの——初期の作品をめぐる——」（『国文学 解釈と教材の研究』一九七五年二月）で、菊地は、次郎を襲う野犬を「煩悩の犬」と解している。なお、菊地「芥川龍之介——意識と方法——」「儉盜・芋粥」参照。

(6) 越智治雄「作品論 儉盜」（『国文学 解釈と教材の研究』一九七二年一月）。

(7) 下坂恵「儉盜」試論（『方位』10号 一九八六年二月）。

(8) 論脈は異なるが、宮坂寛「芥川龍之介「儉盜」論（下）——「黒洞々たる夜」における〈愛〉のカオス——」（『香椎潟』26号 一九八一年三月）が、猪熊の爺はみずからの命を赤ん坊に「託そうと思ひ入れた」と解している。

(9) 三好行雄「芥川龍之介論」「下人のゆくえ——「儉盜」論の試み——」。

(10) 松浦暢「宿命の女 愛と美のイメジャリー」（平凡社 一九八七年）参照。

(11) 『二人小町』には「内心如夜叉」とするところをみれば、芥川の無知を言い立てるに及ばない。なお『日本国語大辞典』（小学館）は、「女菩薩」「女夜叉」の項に、柳多留、幸田露伴『風流伝』、樋口一葉『やみ夜』の用例を引いている。

(12) 注（9）論文。

(13) 岩本裕『仏教説話研究 第三卷 仏教説話の伝承と信仰』（開明書院 一九七八年）「観音——この不思議

識なほとけ」。

井本英一『死と再生 ユーラシアの信仰と習俗』(人文書院 一九八二年)「再生する観音」。

西郷信綱『古代人と夢』(平凡社 一九七二年)第三章長谷寺の夢。

沼義昭『日本人の信仰 限りなき慈しみ 観音』(佼成出版社 一九七九年)第五章観音の本性。

(14) 植田重雄『聖母マリヤ』(岩波新書 一九八七年)。

石井美喜子『聖母マリヤの謎』(白水社 一九八八年)。

(15) 石田英一郎『桃太郎の母——比較民族学的論集——』(法政大学出版局 一九五六年)「桃太郎の母——母子神信仰の比較民族学的研究序説——」。

(16) 和辻哲郎「埋もれた日本——キリシタン渡来時代前後における日本の思想的情况——」(『和辻哲郎全集』第三卷)。

なお、西田長男・三橋健『神々の原影』(平河出版社 一九八三年)にも詳しい。

(17) 石割透『芥川龍之介——初期作品の展開——』第14章「偷盜」——現実回帰の断念——」。

(18) 吉田精一「芥川龍之介の生涯と芸術」(福田恆存編『作家研究叢書 芥川龍之介研究』)。

(19) 長野晋一『古典と近代作家——芥川龍之介』第七章「偷盜」。

(20) 平岡敏夫『芥川龍之介 抒情の美学』「偷盜」の世界——ある読みの試み——」。

(21) 真砂は、多蘘丸の目にはじめ「女菩薩」と映り、のちに「その燃えるやうな瞳に」呪縛され、多蘘丸は単なる色欲をこえて武弘への殺意を抱く。夫の武弘も、多蘘丸に言い寄られる真砂を、「あの時程、美しい妻を見た事がない」と思い、のちにかつて聞いたこともない「あの人を殺して下さい」という、「憎むべき」「呪はしい」言葉を書く。この言葉が、武弘を死に赴かせることになる。なお付け加えれば、これは『袈裟と盛遠』の袈裟

にもつながらる。盛遠は、夫殺しの相談をもちかけたとき、袈裟の顔に「不思議な輝き」を見るとともに「万一己が承知しない場合に、袈裟が己に加えようとする復讐」を読み取って恐怖する。そのあと、袈裟は「蒼白い顔に方壺をよせながら、目を伏せて笑った」。

(22) 高橋陽子「『羅生門』と『儉盜』」(『会誌』一九八〇年一月)。

(23) 大地母神が樹下に立つ女神としてあらわれることについては、『エリアード著作集 第二卷 豊饒と再生』(久米博訳 せりか書房 一九七四年)に詳しく論じられている。なお、芥川には、「怪しげな」楊柳観音の絵像が懸けられている部屋で、妻殺しの体験が語られる《疑惑》という作品もある。

(24) 佐伯順子『遊女の文化史 ハレの女たち』(中公新書 一九八七年) 参照。

(25) 集合的無意識に根拠をもつところの《太母》については、ユング派の心理学者たちの次のような研究による。エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史 上、下』(林道義訳 紀伊国屋書店 一九八四年)、『グレート・マザー』(福島章・他訳 ナツメ社 一九八二年)。

M・エスター・ハーディング『女性の神秘 月の神話と女性原理』(樋口和彦・武田憲道訳 一九八五年)。
河合隼雄『昔話の深層』(岩波書店 一九八二年)、『昔話と日本人の心』(福音館書店 一九七七年)。